

會



報

1957年1月

190

日本山岳會

ティッチーと
チヨ・オユー

★ ★ ★

望月達夫

一九五三年十二月のことである。オーストリアの探検家ヘルベルト・ティッチーはネパール西隅のある露营地で焚火にあたりながら、旅を共にしたシェパたちと過ぐる四カ月の山旅を回想していた。六千米級の山を三つ、五千米級を二つ、これが彼の登った山々なのだがこの時の遠征はカトマンズを振出しに、西部ネパールの山地を遙々越えた旅といった方がふさわしいものだ。つた。

「またやつて来なさい。そして私が知っている。とても高い山と一緒にやりませんか」とティッチーに誘いをかけたのは、サーダールのパサン・ダワ・ラマだ。パサンはテンジンやアンタルケイやギャルツェンとゆうに肩を並べられる、シェルパのなかでも最も傑出した一人である。

パサンがとても高い山といったのは、エヴェレストの西々北二八軒に聳えるチヨ・オユー（八二五三米）のことである。そしてチヨ・オユー遠征の計画は、焚火を囲んでの談話のなかから芽生え、それから十カ月後の一九五四年十月

十九日には、ティッチーとパサンはヨヒラーと共に約東通りチヨ・オユーの頂に立つた。

エヴェレストばかりでなく、K2でもカンチエンジュンガでもマカルでも、八千米峰の殆んどすべてが、十名前後の隊員を擁するかなり大規模な遠征隊により、極めて科学的なタクトックスをもつて登頂されたのに反しチヨ・オユーの場合はかなり違っている。つまりティッチーとパサンとの個人的約束が実を結んだもので、ティッチーの他にはサーブは二人しか加わっていない。従来の考え方からすれば、八千米峰には全く不向きと思われるような小さ過ぎる隊で、こうした隊が成功した点にこの登山の第一の特徴があるといえよう。

ティッチーはチヨ・オユー登頂当時四十二才、登山家というよりむしろ探検家で、二十三才の時既にインド人に変装してヒマラヤを越え、チベットに潜入してグルラ・マンダータ（七二二八米）を試みたことがある。戦後は数カ月支那チベット国境地方のラマ僧院に起居したり、一九五一年には何週間もヒマラヤ山中の修道僧の仲間入りをして過したこともあった。そして一九五三年には西部ネパールの横断をやっている。この紀行は「Land der namenlosen Berge」（1954）として出版されている。

探検家としての彼の経歴のしからしめるところがティッチーは大遠征隊のぎょうぎようしい騒ぎを好まず、チヨ・オユーの場合も極く小人数の仲間に出掛けることを企てた。隊員はオーストリアの著名な登山家ゼップ・ヨヒラーとインスブルックの地理学者ヘルムート・ホイベルガーの僅か二人。サーダーはいうまでもなくパサン・ダワ・ラマで高所用シェルパはパサンが特に選抜した五名という至つて小じんまりした隊であった。

しかし小遠征隊とした理由は他にもなくはなかつた。つまり資金が乏しかつたことである。だから総てにわたつて思いきり切りつめねばならなかつた。しかし装具は最近のヒマラヤ遠征の経験の思う存分利用して第一級のものを選びかつ高所用シェルパ六名の装具はサーブと全く同一のものにした。山麓行進間の食糧は殆んど現地食にたよつた。パンの代りにチャパティを用い、遠慮なく地酒のチャンを飲み、風土病の伝染を恐れて土民との接触を避けたこともなかつた。それでも一行の健康状態は極めて良好であつた。この点もエヴェレストの場合などとはまさに対照的といわねばなるまい。

チヨ・オユーについてティッチーは何も事前に知らなかつた。ただパサンが「やさしい山頂だ」というのに従つたわけである。つまりパサンの判断を信じ、特に乗り越えられぬ困難には出遭わぬだろうと思つたのである。一九五二年にチヨ・オユーを攻撃して登れなかつたシプトンに対し、ティッチーはサーブ三、四名、シェルパ数名の小さな隊でチヨ・オユーに登れるかどうかを質ねたとき、そのくらいの大きき隊があつた山にはいちばん適している、またシーズンとしてはポスト・モンスーン期

が都合がよいという回答を、シプトンから得たのだつた。

ティッチー自身前年の秋は西部ネパールで理想的な良い天候に遭遇していた。サイバルの山麓に達したときは既に十二月の半であつたが、もし食糧さえ充分にあつたら、この季節ですらサイバル（七〇三四米）の登頂は無理ではなからうと思えるほどの好天だつた。だからティッチーがポスト・モンスーン期の支持者となつたのは怪しむに足りないし、チヨ・オユーの攻撃を十月に考えたことも不思議ではない。

ティッチーの一行がカトマンズを出発したのは、一九五四年の九月二日だつた。サーブ三名、シェルパは高所用六名を含む十一名、クリーリーは四五名といつた、八千米峰に対する登山隊としてはおよそ似つかわしくない程小じんまりした隊であつた。九月廿三日ナムチェ・バザールを出発し、シプトンのルートに従つてナンパ・ラヘ達した。峠の頂から東折して小谷に入り、チヨ・オユーの雄姿を間近かに仰ぐ五五〇〇米の地点にBCを設けた。

ティッチーはこのBCから隊の一部をきいてチヨ・オユーの北面偵察に向わせようとも考えたが、小部隊のタクティックスとしては不利であると断じて全力を西面に傾注することにきめた。C1は五八〇〇米のモレーンの上に設けられた。シプトン隊もそこをキャンブ地点としたようである。さらに礫岩の急斜面を登り、西尾根の六三〇〇米にC2を設けた。そして西尾根のつきようとする六七〇〇

米にC3が設けられたが、そこはちょうどチョ・オユの急な広漠たる西壁への要り目となしている氷壁の直下にあつたのである。

この氷壁が問題の所なのだが、一時間足らずという殆んど信じられない短時間のうちに、パサンはティッチとアジバの協力を得て、この氷の障壁にルートを定め、六〇米余の間に足場を刻み、さらにロープを固定した。その翌日も彼らは登高を続け、午後四時頃には約七〇〇米の地点にC4

を設けることができた。山頂へのルートは明瞭に望まれ、彼らは登頂の期待をその掌中に握つたように思つた。荷上げに加勢した二人のシェルパはC3下へ下り、C4へティッチと残つたのは、パサン、アジバ、アン・ニマの三人だつた。

その夜は前の晩ほどには快適ではなく、氷のように冷い風が強く吹きまくつた。しかし七〇〇米の高度でならこのくらい風の仕方があるまい、とティッチは大して気にも留めなかつた。だがヒマラヤでは前にも時々あつたことが起りはじめていたのだ。

つまり夜の中に天候はガラリと變つて、戦慄すべき暴風が襲いかけていたのである。アジバとアン・ニマにサポートしてもらい、パサンと二人で明日は登頂ができるだと思ひながら、睡眠剤もとらずに深く睡り込んだティッチは、夜半強く圧迫してくるテントの布地を顔に感じてふと目をさました。急いで押しのけるとあたりは暴風の雄叫びが耳を聳するばかり

である。風の猛威でテントの支柱は折られ、留め具は氷からはずれ、テントは帆布のように顔の上に垂れかゝつていた。しかしヒマラヤでは応々にして、暴風の夜の後は静かな晴天が訪れて来ると、彼はまだ幾らか期待を失わなかつた。

夜が明けはなれ、テントの布地を透して陽の光が見えそめる頃には、風の猛威はますます強くなつていった。もう一つのテントにいる二人のシェルパはどうしているだろうか、また天気はどんな具合だろうか、そう思ひながらパサンとティッチはやつとの思いで外にはい出した。その時ティッチは不覚にも大手袋を風にさらわれてしまつた。外界は雲もない空に輝きだつた。太陽は雲もない空に輝きだつた。太陽は雲もない空に輝きだつた。太陽は雲もない空に輝きだつた。

吹き倒されたもう一つのテントからは、二人のシェルパがはい出して来た。一行はこゝに留るべきか、退却すべきか決しかねてゐた。突然一陣の強風がシェルパのテントを吹き飛ばそうとした。ティッチは無意識にその上に身を投げ、テントが風にさらわれるのを防いだ。それまでポケットに入れた彼の両手は、この時雪の中にすっぽりはまつた。数分もたぬうちに彼の指は白臙のように変り、全く感覚が失われた。パサンとアン・ニマは早速彼らのズボン

を脱いで股の間にティッチの両手を入れた。アジバはテントから手袋を取つてきて直ぐ彼の手にはめたが、時すでに彼の手指はすっかり凍傷にやられてしまつた。

こうなつては登頂の企てなど到底問題にならない。しかもC4からの撤退といえども、そう易々と出来るとはいへなくなつた。まさに生きるための闘いがはじまるうとしていた。

一行が吹きまくる風の中をほうほうの体でC3へ下り着くと、そこにはヨヒラが待機してゐた。さらに出来るだけ速かにC2へ下り、そこで医学の博士ならざる地理の博士のホイベルガーが、ティッチの両手指の血行を増進させる即効の注射をやつて、応急の手当をほどこした。翌日彼らはモレーンの上にある比較的あたゝかいC1へ下つた。C1は一時的にアドヴァンス・ベイスの役目を果した。

パサンはナムチェ・バザールへ食糧などの補給に下り、十日後にはまた戻つてくる予定だつた。一方ティッチはチョ・オユの再挙に備えてC1で彼の手指を懸命に治療し、ヨヒラはホイベルガーと共にチョ・オユの西にある六二〇〇米峰へ登山を試みたりした。

たまたま十月十一日のことである。レイモン・ランペールに率いられたスイス・フランスのガウリサニカル登山隊が、同山の登攀を放棄してチョ・オユへ迫つて来た。一行中にはフランスの女流登山家クロード・コガンも加わつ

ていた。ランペールは早速チョ・オユの登攀に協力したいとティッチに申し入れたが、この秋はチョ・オユに對するネパール政府の許可はティッチにありてゐること、それに小人数の隊でも八千米峰に成功のチャンスがあることを示すのが彼の目的の一つであること、これらの点からティッチはランペールの協力を頑強に謝絶した。そしてこの二人が到達した結論はこうだ。まず最初にティッチのパーティが再挙を企て、登頂を試みる、その間ランペールのパーティは七〇〇米位までキャンプを進めて待機し、ティッチらの結果を待つというのであつた。ランペールはエヴェレストで秋の恐ろしい強風に遭遇した経験者だから、一日も時日を空費してはいけないと、うるさい位にいうのだつた。

さて、このランペール隊の出現によつて、われわれは従来までヒマラヤの登山では全く聞いたこともない好ましからぬ競争が、しかも八千米峰を舞台にして起りかけているような感じを与えられるようになった。しかし幸いなことに事實は必ずしもそうではなかつた。ランペールに對してティッチは極めて好感を抱いてゐることがつぎの一節でもわかるであらう。

「このエピソードが、われわれの間にかりにも気まずい感情を残したというような印象を与えるなら、それは私の真意ではない。それどころか、私は私自身と同じように、私の二人のティロールの友人に代つて、ランペールに挨拶を送りたいし、彼がわれわれの成功

を心から喜んでくれたことに敬服したいのである。

山頂をきわめた翌日のことである。私は鼻づらと手と足ゆびとを凍傷にやられ、たゞ一人疲れきつてC2へ向ひながら尾根を下つて来た。すると一人の男が下から私を迎えに登つて来るのだ。近づいてみるとランペールだつた。

「頂上は何？」とランペールがブロークンの英語で質問する。

「登れたよ。」私はそう答えた。すると彼は私の手を握り、さらに私を抱きしめ、「おめでとう、おめでとう！」と連呼しながら、単なるジェスチャーではない、心の奥底からの喜びをぶちまけてくれた。

二人が話し合つてゐる時吹きつけてきた強風は、私にとつては山が送つてくれる最後の挨拶ではあつたが、ランペールにとつては、これから来るべき日々のために致命的な脅威なのであつた。

「じやお元気で。」私は下手なフランス語でどういふながら、心から彼の登山の幸を祈つた。

われわれは別れた。しばらくたつて私が振り返ると、見上げる高所にチョ・オユの頂が見え、雪煙がまるで羽毛のように吹き流れ、遙か下にランペールの小さな黒点が目にとまつた。彼がわれわれの成功を本当に喜んでくれたこと、しかも彼が神の意志に對して今一度人間の意志をたたく向ひせる覚悟をきめてゐることは、何と敬服に値することだろう。将来とも彼の山旅の幸をわれわれは祈りたい。彼はきつと今後何回もヒマラヤに戻つて来るだろう。

とも角ランベールの出現が、ティッチーの行動をせきたてたのは疑いない。パサンの帰還や彼のもたらす食糧、燃料油などを待つてはいられなくなつた。強風に悩まされた前の経験から、今度はC3はテントを使わずに氷洞を掘りあげた。しかもこの氷洞で彼らは三日も足止めを喰わされた。一度はヨヒラー、アジバ、ギャルツェンの三人がCへ登りかけたが、しばらくして半ば凍えかけて戻つたこともある。

食糧、燃料油はなくなりかける。パサンはまだ戻つて来ない。しかもランベールの一行は彼らの近くに接近してキャンプをたてはじめた。ティッチーにとつては非常な焦慮である。

十月十八日遂にティッチーらはC4へ向つて行動を起しはじめた。彼らの気分が沈みきつていたのは明らかである。突然一人のシエルバが、三人の者が尾根を登つて来るぞ、と伝えた。ランベールの一行が直ぐ近くに来ていたのだから、恐らくそれはランベールの仲間だろう、だが万一パサンであつてくれ、ばい、とティッチーは心のなかで祈つた。半時間後にはなんとその思いがかなつて、パサンが現れたのである。しかも新しい食糧と燃料油などを充分に背負つて。元気が一同に湧き起つたのはいうまでもない。

とらず、夜を日に継いで難路を歩きつめ、信じられぬほどの短時日でナム・バ・ラを越え、しかも殆んど疲れも示さずにティッチーのもとへ帰つて来たのである。その上いま直ぐにもC4へ向おうと強い覚悟のほどを示した。「もしランベールがわれわれより先に頂上へ達するなら、わたしは喉をかききりますよ」と彼は繰り返すのでした。

高度四〇〇〇米足らずのマールンからチョ・オユーの頂八五三米までを僅か三日間で登りきつたパサンの登攀ぶりは登山の歴史のなかでも全くユニークなものである。これに匹敵し得る登攀が出来ような人間は、おそらく他には求められない——ティッチーはそういつている。

パサンがC3へ到着した半時間後には、一行はC4へ向つて出発していった。急峻なピッチにさしかると、まだ充分ピッケルをふるえないティッチーは非常な不安を感じた。しかし雪は幸いにも二週間前の深い軟雪とはうつつて変り、風にしめられた堅雪にランポンの爪がよくきいた。前のC4より五〇米上方にテント二張を張つてC4とした。そこは雪が堅く雪洞を掘ることが不可能だつたからである。

ティッチー、ヨヒラー、ホイベルガー、それにパサン、アジバ、ギャルツェンの六人がこゝで夜を過ぎた。ティッチーは両手でパサンとが頂上へ向う組となり、三人ずつ分れて二つのテントに休んだ。ティッチーはホイベルガーと

ギャルツェンと三人で一つのテントに入つたが、横になると色々な思いが脳裡を駆けまわる。山頂へ行くのは二人ときめたものの、もともと登頂を約したのは自分とパサンでなかつたか、両手は不自由だが、もう一度元氣を出して行けないだろうか。遂に彼は寝袋をぬけ出し隣りのテントに休んでいるパサンとヨヒラーのもとへ行き、俺と一緒に行くよといひ出す。二人は無言止めせず、むしろ同行を喜ぶ。

C4の高度はおおよそ七〇〇〇米だから、明日は少なくとも二〇〇〇米は登らねばならぬ。天気と雪のコンディションが悪ければ論外だが、それが良くて山頂をやるには長すぎる高距だ。しかしC5設ける可能性は既になかつた。だから夜明け前に出発し月光を利用しようと考えたのである。

その夜は小さなテントに三人つまつて寝たためか、よく睡れなかつた。翌十九日の朝、ティッチーがテントから外に出た時は、チベットの山々が真紅に染り、ヨヒラーとパサンが無言のうちにルツクザックの仕度をしていった。ホイベルガーとほかのシエルバはサポートとしてC4に残つた。

烈風にたふかれて堅くしまつた雪はランポンによくきいた。手の不自由なティッチーが、ザイルで支えてほしいとパサンにたのんだ。唯一の場所は、例の岩壁が出ている箇所、どの写真にもよく現われている所だが、こゝではしばらくの間登りが必要された。こゝ以外の所では三人共ロープも結ばず、極めて調子よく前進する

ことができた。烈風もこの日は力が衰え、僅かの微風が彼らの背後から吹いていた。その日午後三時ティッチー、ヨヒラー、パサンの三人はチョ・オユーの頂に達した。パサンはオーストリアとネパールとインドの小旗をピッケルにつけて振り、チョコレットとアメ玉を頂の雪の中へうずめた。三十分後に頂を去り何の故障もなくC4へ帰つた。下山も予定通り進み、ナム・バ・ラを越え、ランベールに数日滞在してティアンポチを往復し、カトマンズへは十一月廿二日に帰還した。

チョ・オユーは従来八一五三米(二六、七五〇呎)と公式に記録されていたが、ディレンフルトなどは既に、八二〇〇米はあるといつていた。今度の登山によつて八一八九米(二六、八六七呎)が正しいという結論が出たのである。

なおティッチーのパーティと競争の立場にたつたランベールの隊はどうしたろうか? 彼らはC2に至るまではティッチー隊よりもつと北側のルートを選んだ。しかもC2、C3、C4は晩秋の強風のためすべて氷洞とした。パサンがナム・バ・ラを越えた十月十七日には、コガガンとランベールは六〇余米の高さの氷壁に登路を開いた。ティッチーらが登頂した十九日はまさに理想的な好天であり、それ以後こうした絶好の日を訪れなかつた。ランベール隊の登攀の番が来たのだが、二十三日には気温が零下二五度Cにも降下して烈風が吹きまくり、二十四日は零下三〇度Cで、その翌日も余り良くならなかつた。二十八日にコガ

ンとランベールとはC4から最後の登頂を試みたが、七八〇〇米(或は七六五〇米)の地点から引き返さざるを得なかつた。たゞ、この時コガガンが達した高度は、従来までの婦人の最高記録であるヘッティ・ディレンフルトがシア・カンリーで作つた七三二五米をかなり凌駕したものであつた。

本稿は“Cho Oyu” by Herbert Tichy (Mountain World, 1955, pp. 81-95) 及び G.O. Dyrenfurth: To the Third Pole, pp. 215-7 によつた。脱稿後に諏訪多氏の『第三の極地』の訳が出た。なおティッチーの手になる単行本も遠からず邦訳が出るはずである。

山岳五十年

大変遅くなりましたが、山岳五十年がやつと目鼻がつき三月はじめには会員諸氏のお手もとにとどけ出来ることになりました。内容は次のとおりです。

マカラコラム 今西 錦司

マネパール山旅 藤田 和雄

マ酸素呼吸器について 村山 雅美

マ黒部の山と人 冠 松次郎

マ日本山岳会創立当時の思い出 篠田 軍治

マ山岳界今後の展望 志村 寛

マ写真八枚、二四〇頁、定価五百円(なお三十三年度会費未納の方にはおとどけ致しますから、至急お納め願います。)

風・と・寒・気

金坂 一郎

昨三十一年末には、厳しい寒さとともに冬が訪れた。山でも例外ではなかった。穂高の白出沢に入つた日大の学生は、その大部分が凍傷にやられてはいる。ひどいになると、テント内でシユラフザツクに入つたまゝ足の指をやられた。

低気温は凍傷の有力な原因の一つである。しかし低気温だけが凍傷の原因ではない。例えば無風快晴というような日には、零下二〇度くらいでも裸で日向ぼつこができるほどおだやかな日もある。その反対に、強風下では零下一〇度でも圧倒的だ。

人体は絶えず熱を発生している。この熱は適度に外界に発散されて、適当な体温を維持することが必要である。しかし放熱が温度になると体温が低下し、ついには皮膚の表面から凍結を始める。これが凍傷だ。

だから気温がさほど低くなくとも、体の熱をうばい去る風が強いときには、凍傷の恐れは増加する。

この年始めに友人五名とともに、白根山頂から横手山に向かう折、真正面から一〇米以上の強風を受けた。その日の気温は、素手で金具に触れてもべたつくかどうかという程度であつたから、さほど低くはなかつたと考えている。山頂の風かげを出てから、正面から吹

く風に用心して、筆者はときどき顔をそむけながら歩いたが、同行者のうち二名が、出発して五分もたないうちに、鼻の一部を凍結させてしまった。これなんか風が大きな原因となつた凍傷の例である。このとき逆コースを来た人たちは、この風を大して苦にしていなかった。

風が体熱をうばうことは誰でも知つてゐる。しかし風の影響がどの程度のものであるか、よく知られていないため、登山者としては、簡単に測れる気温だけを問題にし、風の影響をうっかりすると度外視しやすい。

これについて最近便利なデータを手に入れたので、こゝに紹介しておきたい。データは附図として示す。

線図に標題に示すように、日かげにおける、乾燥状態の風冷を調べたもので、体表面の温度を三三度としてある。曲線上の数値は、一時間に一平方メートルの体表面から失われる熱量をキロカロリーで示す。直射日光の下では約二〇〇カロリ減少するから、そのときは左隣の曲線を見ればよい。曲線に付記した感じは、労働してはいない状態におけるものである。

従来風の影響については、風速一米増すごとに、気温が一度程下したほどの寒さを感じるといわれている。これは必ずしも否定できない。例えば線図によると、零下五度で食速五米の放熱量は、零度で風速一〇米の放熱量と同じであることがわかる。しかし気温がもっと低いときには、曲線が寝てくので、風が少し強くなつただけ

でも、危険限界に入る。また風がひどく強いときには、曲線が立つてくるので、それ以上風が強くなつても、寒気の増加は大して感じないことになる。

曲線のうち一四〇カロリーの線は、露出部凍傷の危険を示す。例えば零下一〇度のときは、風速一〇米で危険になるが、重労働をして体の発熱量が大きいときは、この程度では凍傷にまで至らないかも知れない。気温が零下五度よりも高いときには、風がいくらか強くとも一応凍傷のおそれはないことになる。また風の弱いとき、例えば風速二米以下のときには、零下三〇度でも手袋不要といえる。

しかしこゝに注意しなければならぬのは、この線図は乾燥状態にあるもので、もし体表面に水分があるとするば、それが蒸発するとき大量の熱をうばうから、この線図だけで危険かどうかを知ることはできない。これはあくまでも乾燥状態においてのみ適用するデータである。

水分の影響としては、戦時中の関東軍あたりで研究したはずであるが、筆者は詳らかにしない。しかしとにかく、被服を濡らすことは大きな凍傷の原因である。テント内中に凍傷した前例も、おそらく被服の湿気が原因であらう。

またビヴァークのように、体を動かさないときには、人体の発熱量も小さいから、この線図に示す以上に危険である。このような場合、被服を濡らしていることが多いため、一層危険と見なければならぬ。

また凍傷に対する抵抗力は個人差が大きく、練習によつて抵抗力を増大させることもできるようだ。そして空腹時や過労、睡眠不足の状態においては、この抵抗力はなほだしく低下することも知られている。だからこゝに紹介したデータは、凍傷の問題を考えるにについては、極めて大ざっぱな目安に過ぎないことを承知しておいていただきたい。



会員通信

南極だより

木下 雄

チリの南の果の西海岸の多島海を航海しています。幾千方キロにわたつて住む人もない淋しい氷触地帯です。氷にみがかれた羊背岩と、せのひくい針葉樹と枯れた芝草の急斜面、尾根には雪が残り、ところどころ細い糸を引いて流が落ちています。今朝は「Ventisquero」の水河を見ました。鱈は島々の間の狭い水路を縫つて灰色の雲の下を静かに進んで行きます。この辺に山岳会からパーティーを出して見るのも悪くないと思います。ニュースヴァリニューはないです。

しようが、人つ気のない寂寥たる山々の中を歩きまわるのも悪くないでしょう。

明日 Punta Arenas に入ります。これで当分人ざととはお別れです。

サンチアゴでは成田公使に大変お世話になりました。帰りは南米の東海岸まわりには確定しました。ブエノスアイレスとリオ・デジャネイロに寄港します……時期は三月に入ろと思ひました。

私のアドレスが変わりました。
Navy No. 33, Box 10-BRavo,
c/o Fleet Post Office, New
York, N.Y.

皆様によろしくお伝え願ひ上げます。

(昭和三十一年十二月四日付。封筒には十二月五日付のプンタ・アレナス局のスタンブがおしてある)

米海軍南極観測艦スターテンアイランド号にて、日高副会長あて

ケーブにて

村山 雅美

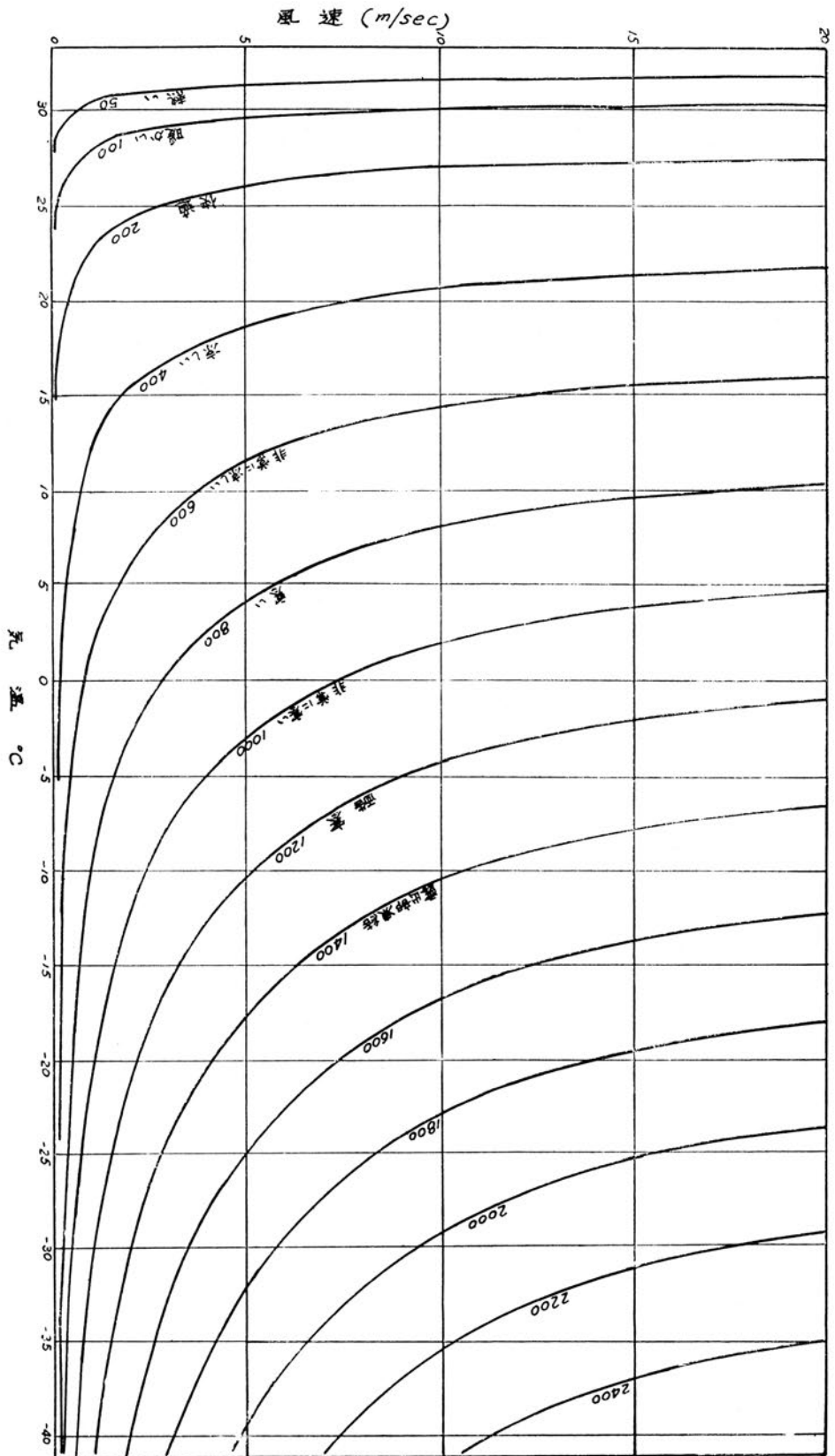
噂に違わぬ、よしあしに特徴のあるケーブの町、十二月二十日から二十九日まで滞在です。

早く氷の中に入らねば、体はなまつていけません。もつとも二十六日には南阿山岳会の連中と近郊の山へ岩登りに行くつもりです。宗谷丸の傾きつぷりは、最面四十四度ともなると大したものですが、今日はさようなら。

一九五六年十二月二十二日ケーブにて

× × ×

NOMOGRAM OF DRY-SHADE ATMOSPHERIC COOLING



曲線上の数字の単位は $Kcal/m^2/hr$.

山登りはもう忘れたのか、とよく問われて当惑する。学校では化学の教師であるが、スポーツの方に関係があつて、そのスポーツはいうまでもなく登山であるから、忘れるわけにはいかない。

昨年の夏であつた。ある週刊紙に、浦松さんが、登山はスポーツであるからエチケットを守らなくてはならないという注意を書いておられた。山日記の「山に登る人」のために、松方さんが、登山はルールのないスポーツとしておられる。私には二つとも大変興味があつた。しかし、こゝまでに二十年の歳月を憶わないわけにはいかないのである。私は早稲田の山岳部員であつた。今こそふ

るわなないがその頃の早稲田は、恐らく、スポーツの面では一番理解のある大学である、自他共に許していたのではなかつたか。にも拘らず、体育会山岳部の部員が、登山はスポーツであるといいきるためには、大変な勇気が必要であり、それに伴う非難を覚悟せねばならなかつた。山登りという行動

の中には、スポーツ以外の面の大きいことは誰でも、容易に理解出来るのである。かつスポーツ以外の山登りが数多く行われていたとしても、怪しむに足りないだろう。

二十年の歳月は無駄ではなかつたのである。今や、スポーツとしての理解は、一日一日と深まりつつある。こう私は解釈している。私が久し振りに、会報に原稿を

登山型式の問題 関根 吉郎

送るについては、一つの目的があるからである。一九五七年度版山日記に、「積雪期の山」という項を受持つておられる。氏は同時代の宮であるが、山では確か一度もお目にかゝつたこともないの

で、山の話はまだ一度もしたことがない。氏の種々の解説・注意は極く一般的のものであり、同感の意を表したい。ただ、最後に「登山形式」という一項目がある。

気圧と酸素分圧の低下に対する人体の馴化を意味するのであるから、その必要のある山をまたない山が行われようべくもない。しかし、日本で行われている「極地法登山」というその内容が果してナンセンスであつたり、笑えぬ悲劇であろうか。

こゝで私が多くの会員、特に学生諸君に考えて頂きたい土台が二つある。

ラ・ゴース博士

吉沢 一郎

全米地理学協会 (National Geographic Society) 会長 John Oliver La Gorce 博士の勤続五

十年祝典が一九五五年の十一月十七日に挙行され、アイク大統領を含む約三百にのぼる友人と関係者から、世界の地理学界のために祝辞が送られた。その際同協会の管

財委員会とは同委員長 Gilbert Grosvenor 博士の名を冠したゲロスビナー牌をラ・ゴース氏に贈つた。この賞牌制度は一九四九年に創設されたもので、同協会の事業目的である地理学上の知識の向上と普及に力を尽した人に授与されるものである。

ラ・ゴース博士は以前無所属の新聞記者やウエスターシ・ユニオンの通信員をやつていたこともあるが、地理学協会に入つてからは副秘書、主筆補佐、副主筆、副会長などを歴任し、一九五四年にな

こゝで氏は、所謂「極地法登山」というものについて論じられているのであるが、結局あんなものにはナンセンスだ、という意味にとれた。

ロングスタッフが一度きり位しかいわない言葉であろうから、極地法は日本語だと私はいい、日本語にしては如何にも「大げさ」だからこの言葉は好まない。まして本来の内容は、高度における、全

一つは、私の少年の頃には、山岳部をもつ中学は稀であつた。今は、高校は無論のこと、女子学生だけの大学や短期大学にも山岳部があるのである。そして一つのスポーツ団体として存在する。スポーツは明かに教育の中に入つてい

るのである。これが新しい学校制度である。

もう一つは、私どもが二十年程前、この型式の登山をやり始めた頃、いろいろの非難があつた。その人々は一応の名士であつたかも知れない。名士でも日本の冬の山は知らず、かつスポーツを知らない人々であつた。時がたつにつれ、その人の所属する登山団体も、後輩の学生達もこの型式の登山を始めるようになった。

ル・アメリカの郵便局長になつてくれといわれたことがある。その時は最も南に位置する合衆国郵便局で消印をして貰うために、探検隊員から何千という郵便物が積込まれたらしい。

バード隊に郵便局長として同行するよう奨められた時、博士はバード隊長に「シナにある全部のお茶を頂いたとしても、そんな寒いところへは真平です」といつて断つたが、いつの間にか局長さんに任命されており、宣警をやらされ、その上五千弗の公債までおつかふされてしまった。そこで博士は素早く体をかわし、自分で局長代理を任命して、それに南極へ行つて貰うことになったという。

博士の名前は世界中にバラ撒かれている。即ち南極大陸にはラ・ゴース山脈、ラ・ゴース山、それに第一回バード探検隊の建てた気象観測所にも彼の名前がつけられている。アラスカにもラ・ゴース山脈、ラ・ゴース湖、ラ・ゴース氷河というのがある。

地質学上でラ・ゴース弧というのがありますが、これはユタ州のエスカランテ河に沿つた特異な岩石構造につけられた名称である。なお、マイアミの海浜には、博士の友人のカー・フイツシャー氏が大部分を作つたカンツリー・クラブとゴルフ・コースがあるが、これらにもラ・ゴースという名前が冠せられている。

★小集会お知らせ★

二月廿六日(火)午後六時から
休協会議室で辻莊一氏の山の音楽鑑賞会を開きます。

島真の手紙

土田 新一

「故島田真之介氏のこと」と書くのが本当であろうが私には「島真」と彼を呼ぶ方が自然であるし故人もこの無礼を許してくれるだろう。

関東の岳人には馴染がすくないかも知れないが、阪神の一時代前の山仲間が何かと世話になつた神戸の山具商としての彼の生涯は経済的には恵まれたものとはいえないが、最後まで山を愛し、山と身近に暮らすために選んだ生活の手段と戦つて終つた一生は若し彼に後顧の憂えなければ満足なものであつたらう。

系統立つた学問もなく、山の道具の進歩のため就中ザイルの研究に努力し、また、地元神戸の登山界に尽した彼の仕事は高く評価されてしかるべきものと思う。

私が島真を知つたのは神戸の大学に入つてからで、山と加納町と三宮警察署東隣りの薄汚い木造ビル二階の好日山荘神戸店を巡歴していた呑気な生活の間に一山具商と一顧客としての関係を離れて親しい山友達となり、大戦後宿屋の軒先を借りた栄町通の店、三宮の最後の店を出張の余暇に訪れ、また彼は東京に来たときは連絡をしてくれ色々関西の話を聞かしてくれた。

島真は飄々としながらも芯になにか一本強いものを持つていた人だつた。私にくれた彼の手紙は島真の人

柄がにじみ出ており私事にわたる部分があり恐縮だがご紹介したいと思う。

昭和十九年三月廿八日附(福井県大野郡石徹白村石徹白谷屋旅館)

「……私もあれから随分山へ登つた、殆んど毎月のように出かけた、今年は細野に行つた。今表記のところにいる。明後日より立山に行く。」

東京の好日山荘は廃業し産業戦士になつてゐる、大阪も近く退陣する。一人島真のみ池崎春草の夢を描いて頑張つてゐるが本年一杯は持つまい。汽車に乗つてゐる時が楽しいとの言葉まことに同感、登山者には共通のものでしょうね。田中先生に先日会つた。氷河の山旅はどうかと思うが東印度は良書といえるでしょう。お読みになりましたか。日本の山岳界はこのまゝではもう長くは持つまい。さりとて軍部にヘツラウ連中ばかりでは何も出来まい……」

(注)①この手紙は海軍にいる私に来たもの。
②田中先生―田中薫先生。
昭和廿七年八月十二日附

「暑い都会生活も山を知る者には実に辛い毎日だが何処かへ出かけたかね。山へ行き度く始めた私のさゝやかな仕事も年のせいからだん／＼フアイトを失くして行く。時にはピッケルとアイゼンの域を夢に見る。山旅を楽しむ年になつたが子供であり度い。時に通産省のエライ人に知合はありませんか、何とか捜してほしい。私も田舎にあつても外国に思ひは馳せている。何とか皆さんの喜んでくれる物を入れてみましょう。お富さん生きてゐるか?」

(注)お富さん―富川清太郎氏
昭和廿七年十月六日

「前略秋色漸く濃い今日此頃秋を楽しむ山へ行きましたが、夏山は大分歩いたが何時もながら秋は楽しめない。淋しい、次に貴兄が定めて期待してくれていると思う輸入につき漸く目鼻がついた。本月中旬頃ベントが来る、次々に変つた物を入れて貰ふ、貧乏な島真も当地にもエライだろう……」

昭和廿八年五月四日
「……麻生さんにも幸い海野の処でお会いしてまことに幸いだつたと思つてゐます、あの方なら今の入連ではトチモ扱えなからう、小さい人物では歯が立たぬ筈だと感じました。」

東京は玉石混じりだが兎に角いろ／＼の人間が息を吐いてゐるのが面白く思ひます、目下神戸は早稲田の人達を迎えるべく準備に一応私店が中心のカチチで忙しい目にあつてゐます。何にせよ遠征隊を送迎する神戸港は光栄です……六月に再度尾瀬へ行くか日光から鬼怒川を下つてみるか教えてほしい。電話番号が変わつたので御通知します借物に非ず……」

(注)麻生さん―麻生武治氏
昭和廿九年八月二日附

「……時に有楽町の寿司屋の張りビラに江戸前カンパチもう一つ文甲イカと書いてありました、問うのもシャクだから人にきいてみていますが判らないので貴方に教えてほしいわけ……」

島真の冥福を心から祈る。

年次晩餐会

日時 十二月十五日(土) 午後五時半

場所 山の上ホテル(神田、駿河台)

出席者(順不同) 冠、模、鳥山、別宮、日高、松方、藤島、三田、神谷、田辺、吉沢、辻、伊藤(集)、織田、近藤(茂)、中田、加藤(泰) 福井、工業、黒田、高山、沼井、藤木、田口、入沢(郁)、野口、橋本夫妻、諸岡、増田、石原、吉田、佐藤(久)、山下、沼倉、松丸、村井、小原、金坂、太田、折井、藤平、古沢、今村、小倉(茂)、小倉(勝)、近藤(隆)、日下田、碓井、高橋、鴨原、小林、木村、山崎(金)、佐藤(佳)、谷、神原、山口川村、瀬名、大内、井形、久保田長谷部、桜井、山本、前原

× × ×

厳冬の期

後立山縦走

相沢裕文

厳冬の期、後立山縦走は戦後後立山山岳部が宿望していた計画であつた。二十八年十二月から二十九年一月にかけてその計画がやつと実現し、成功した。厳冬の期、後立山縦走は戦前立大において幾度か行われたが、昭和七年十二月二十一日から翌年一月五日にかけて、湯浅、新波両隊員によりはじめて白馬から鹿島槍、爺岳まで縦走。また戦後は関西学院大学山岳部によつて二十八年春三月から四月にかけて針ノ木から白馬と逆縦走が成功した。戦前の立教隊は大雪溪から登り、扇沢をくだり、関学隊は春山であつたが、われわれは天候の最も悪い正月を挟み、コースも樺池から登り、乗鞍から白馬―針ノ木、蓮華、そして針ノ木沢をくだる計画で行うことにした。

それまでの冬季合宿は「新人の養成」が毎年の主眼であつた。その縦走を行つた二、三年前もいづれも同様、前年は剣の早尾尾根から剣尾根、ハツ峰、源治郎、南の悪沢、赤石、前々年は天狗尾根から鹿島槍、南の甲斐駒、仙丈から野呂川をくだつて北岳、間ノ岳。それに参加した数多い新人も上級部員となり上が多く、下が少いというメンバーからしても最も後立山縦走の計画がやりよかつたという条件があつたわけだ。それによ

つて三名の縦走隊、四名のサポート隊を抜いた残つた部員も東尾根から鹿島の計画が出来、全部員ムダなく冬山合宿を行うことが出来るようになった。

その年は天候が比較的よかつたこともあるが不帰、八峰キレットの悪場、強い体力を要求される冷から新越乗越を踏破し無事、成功出来たことは杉山桂吉、吉川慎三、関祥三隊員の力とチームワークによるものだったと思う。

十二月十六日四名のサポート隊がつき、杉山、吉川、関の縦走隊は森上駅を降り、新田部落から樺池に向つた。白馬山麓の農家では「こう雪が積らなくては何かと外へ出て仕事をしなくてはならざ落着かなくてはしょうがない……」というように十二月とはまつたく思えないほど恵まれた快晴。白馬から五竜、鹿島槍と雪煙すらあがって白銀の衣をまとつて静まりあがって土の上を歩くなど意気込んできただけにやや気抜けした感じ。スキーもザックにつけ八貫平均の荷を背つて御殿場まで予想外早く着くことが出来た。しかし新田を出たのが遅かつたため陽も白馬の蔭に沈みかけている。ここから雪も深くなつたのでスキーをはいたが、揃つてスキー下手から樺池小屋までどころか早大ヒツテまで灯をたよりにするありさま。結局早大ヒツテ泊りとなつてしまつた。翌十七日頂上小屋まで、と真暗の中出発したものの、樺池小屋附近で冬山と思ふ雨、やむなく樺池小屋で沈滞の仕末。

十八日朝日に輝いて白馬が現われた。雲一片もない快晴。前日の雨で雪は堅くしまりアイゼンの上にはワカンをつけて出る。スキーでないとビッチも揃い快調に高度をかきあげ。天狗原でワカンをはずし、乗鞍の登りは「キイ キイ」という音も軽くアイゼンを利かして夏とはうって変り早く登る。小蓮華、白馬とたん／＼とした稜線をなんの苦もなく夏道にそつて歩き山頂小屋に一時すき着くことが出来た。

しかし夜に入つて黒部側から猛烈な風が吹きはじめ、一夜明けても勢はおとろえず、だだつ広い白馬の斜面を岩をかんて吹き流れている。天候を見に出るときもアイゼンをはかなくては横つ倒しにされるほどで滞在と決め、一日真暗な小屋に沈滞する。外でマイナスイオン、室内でも十度を越しシユラフに入つていても手がこごえるのはまいつた。

一日中寝ていたので翌二十日早期の出発は起きるにもなんの苦もない。四時四十分縦走隊いよ／＼スタート、空身のサポート隊が三隊員の荷を背つて真暗の中出発する。食糧、燃料は唐松、キレット、冷、針ノ木の各小屋に荷あがしてある。縦走隊は軽い荷物アッ米、カンパン、圧縮したカステラ(クズ)の食糧に、ツェルト、ナイロンザイル、三ツ道具などのほかビバーク用具一式でかなり軽い装備。風は前日よりやや衰えたものの身体を風に向けて傾むけて歩くほどの強さで杓子のトラバースあたり寒さはたとえようもない。鐘の頂上で夜がしらじらと明けてきた。天狗平に着きやつと陽が当たってくる。風をさけて休み、こゝでサポート隊と別れることになつた。サポート隊に送られ勇躍出発快調なビッチで第一の難関不帰の二峰にさしかかる。いよ／＼信州側のトラバース、はじめの十メートルくらいは垂直な雪面をなしている。ジツヘルをしてまず三メートルばかり降り、そこから腰までもぐ不安定な雪を強引に水平にトラバースしはじめた。ときどき足もとの雪がポツカリ抜け下がつけてみえ、ヒヤツとするこゝ数度、約二十メートル通過したたの上にルートをとり、堅い雪にアイゼンを利かせて二峰の頂上に出た。三名が登り切るまで三時間をついやし、まつたく体力を使い果たした感じ。唐松の登りはそれだけに苦しかつたが、唐松小屋に二時に着くことが出来た。「時間が早かつた白岳までとばそう」とはいつていたものの、行く気にはならざ泊りと決める。

二十一日濃霧と強風があげれまわつていて。準備だけしてしばらく様子を見ていたが、十一時ごろになつて濃霧は晴れないが風がやえざつたので出発、牛首はたえず稜線を歩き、なんなく通過二時白岳小屋に入る。

二十二、三日両日風雪のため滞在。二日風雪にくれた翌二十四期待した天候は相変わらず狂つたようにあばれている。「もう晴れてもいいころだ」と数分おきに天候をみているうち十時すぎに晴間が現われた。やゝ遅いとは思えなが、十時四十分小屋を出てキレットに向う。五竜の登りは相当とばす。頂に立つとキレットまでの凸凹が延々と続いている。天候は午後になると崩れそうなので頂上からキレット小屋まで約四時間の間休みなく歩きつづけた。キレット小屋は雪が吹込み宝石をちりばめたような美しさであつた。

二十五日いよいよ降出しそうな天気、こゝに閉じ込められては大変とばかり出発する。キレットは這松にザイルをかけアブザイルで底部にくる。底部からは露出している針金を伝ひ回込んだが予想外不安定で悪い、リッジに出たから北峰目指して一歩々々高度をかきあげた。吊尾根から北峰に出て二、三日後東尾根から登つてくる東尾根隊に連絡のため手紙をケルンに結びつけて残す。冷小屋はすつかり雪に埋もれ尾根の一端をちよつと現わしているだけであつたが、中の居住性はいい、夕方から風雪に変わり、翌二十六日も同様で一日沈滞する。

後立山の中で冷附近が最も雪が深い。樹林帯の中では腰までもぐつてラッセルに一苦労する。二十七日風雪は続いていたが、少しづつおさまつてきたので八時半冷小屋を出る。ラッセルにラッセルを交互に続け爺の腹をまき、種池に真一文字にくる。このころ風雪もいつの間にか止み、晴れた。もし濃霧が続いていたら爺の南峰に立つた場合、その南に派出している尾根をまちがえてくだる可能性もあると思われた。岩小屋沢岳を過ぎるころ天候が再び悪くなつてきたので越中側の山尾根を五十米ほどくだつた地点でビバークの用意をする。明日の好天を祈つて寝

袋に入つた。

二十八日せつかく折つたものの天候は前夜からの風雪。通風の悪いツェルトなので起きてみると身体がびつとり、これはたまらぬと早速出発する。新越乗越から雪も強まり、鳴沢、赤沢岳に至るころは風雪もかなりの強さ、スバリを登るとき一時止んで「しめた」と思つたのもつかの間、針ノ木の頂上ではまたまた猛烈に叩かれ、峠にくる道をまちがえ右の出尾根を百米余りくだつてしまつた。天候が悪いうえ疲労しきつていたので、やゝ傾斜の緩い所にビバークした。

二十九日昨日の吹雪とはうつつ変り白馬以来の快晴に恵まれた。

立派な遺産

—水野君の子供たち—

渡辺 公平

終身会員、水野行光君の富士山における遭難は、僕には文字通り晴天のへききであつた。戦争による交友の中絶によつて、不覚にも僕は水野君が終身会員であつたことをすっかり忘れていたのだ。戦後も健在なのであるか、相不変山に登つてゐるのだろうかなどと昔の仲間間で話してあつたものだつた。

水野君が遭難したのは昨年十一月十二日の昼前だつた。その一週間ほど前に僕も富士に登り、日大、東大、慶大の遭難者の願福を折つてきたばかりだつた。まさ

黒部をへだて、剣、五色ヶ原が新雪をボツリつけて朝日に赤く輝つてゐる。針ノ木頂上をふり返つてみてとんでもない尾根をくだつたことがわかり、氷のついたツェルトをまともなバーク地点からトラバースぎみに峠に出る。峠小屋はすつかり埋り使用は出来ない、荷を峠に置き蓮華岳往復をする、頂上で三人固い握手を交した。強く吹きなぐる風の中でしばらく感激にひたつた。ふり返つてみる後立山連峰、多くの苦しかつたこともいまはウソみたいに感じられた。峠から大沢小屋まで一氣にくだり、成功した喜びと感激に夜のふけるのも忘れ、最上の楽しい一夜を明し、翌三十日大町に出た。

か、それから一週間後にこの山でまた一人の古い山友達が不慮の死をとげようとは……

水野君は富士、南アルプス、秩父の山々を特に愛していた人だつた。僕との交友も南アルプスを通じて僕の学生時代からはじまつたのだつた。その頃から度はずれに山好き、いわゆる山気狂いに近いほうであつた。

僕が大学の山岳部を卒業した年長男が生れた。不二男君である。山の名にしようというオヤジの強い希望で協議の結果、そうなつた。二年後に次男が誕生、今度は穂高にしよつたという。穂高はちよつと行きすぎじやないかと僕はいつたのだが、いややつぱり穂高がいいということになつた。三男がそれから三年後に生れた。今度は断然南アルプスでゆこうというので水野君の好きな白峯や赤石の山名が

いろいろ候補にあげられたが、聖岳の聖平をショヘイもじつたらどうだと、この時は僕が積極的提案したら忽ち賛成した。後でそれも行きすぎだわと今度は自分の女房からたしなめられた。

水野君のお通夜の晩にその聖平君に会つたら、いつそヒリダイラとしておいてくれてよかつたと当人からいわれていさか安心した次第だつた。僕が命名に関与したのはこの聖平君までであつたが、三人のうち惜しくも穂高君のみ一昨年病歿してしまひ、その成長した姿を見ることができなかつた。しかし不二男君も聖平君もオヤジゆずりの山好きで、それぞれ自分の山をもつてゐることを知らされたのは悲しみの中にもなにか明るい光りのようなものがさしてゐるようであつた気がしたのだつた。

しかし水野君にはあと二人の子供が生れた。戦争が僕と水野君との交流を絶ち出した昭和十二年に生れたのが、水野君の最後の登山のパートナーだつた弥彦君である。亡友の最期を僕は高校三年生の弥彦君から詳しく聞くことができた。やがて中央大学山岳部の一員として活躍するであろう弥彦君の今後を僕は楽しみに見守つてゆきたい。弥彦君の後は甲斐駒山脈の秀峯浅夜岳の名をとつた浅夜嬢がある。

五人の子供のうち身体が弱かつた穂高君だけが山に登らずにこの世を去つたが、穂高にだけは一度行きたいなと生前いつていた薄幸の兄の希望をかなえてやるため、一昨年の十二月末、弥彦君は亡兄

の写真を西穂高の頂上の岩陰にそつと置いてきたという。

水野君は五十五歳でこの世を去つてしまつたが、頼母しく心優しい子供たちを残したことは幸せといふべきかも知れない。(一九五七・一・一)

伊藤愿君を悼む

日高信六郎

伊藤愿君がなくなつたのは淋しい。

今から二十年あまり前と思う。外務省につとめていた私のところに松方三郎君がみえて、こんど京大山岳部の連中で計画したヒマラヤのぼりの準備に仲間の伊藤といふ男をインドにやるから、旅券下附の口添えをしるのとのことであつた(伊藤君はインドに渡り、ヒマラヤンクラブにわたりをつけたとして万全の用意をとゝのえたが、国際状況急変のため遠征はとりやめになつた)。これが伊藤君と知り合つたはじめなのである。だから同君が京大山岳部のつわもの

で、RCCの創設期のヴェネチアだといふことなどよく知らなかつたが、山はたちまちにして山仲間をくつつけてしまふ。しかもそれがヒマラヤというのだから。

その後私は華中方面にいたので伊藤君が北京でオーウェン・ラチモアなどと交りながら中国に打ちこんで研究をしていられる噂は聞いていたが、親しく会う機会もなかつた。そのうちにいわゆる日華事変が進展して興亜院というもの

が出来、私は東京の本院に伊藤君は北京の連絡部と同じ役所につとめることになつた。あるとき満蒙華をつらねた出先官憲の打合せ会が東京でひらかれた。例によつて日本本位、軍事優先の統制一本槍の報告や意見がぎつぎつと述べられるうちに、華北連絡部の順がまわつて来ると、年も若く地位も低い一調査官が立つて無理のない経済施策を主張し、あきれた眼をむいたりする軍人や役人にはいつこう平気で、中央や出先の方針と施策を遠慮なくコキおろす、しかもそれがごくあたりまえのような調子なので、聞いている私としてはおもしろく愉快でたまらず、ひそかに声援を送つたことを思い出す。

その頃出張して北京飯店にとまつたとき訪ねて来ての相談は、いま結婚をすすめられ自分もその気になつてゐるが、なにぶん先年ヒマラヤ登山を思い立つたとき、成功するまでは結婚しないと仲間同志やくそくした手前どうも踏み切れないと浮かぬ顔である。そんなことを気にすることがあるものか、戦争などという不可抗力で実現出来なかつたものが何で結婚の妨げになろうか、それほど気になるなら風つづしにその仲間に向つて見たまへ、良縁を心から祝福はしても文句をいう奴なんか一人もいないよというところ、そうでしかと未だ気がかりな様子、何ともいえない山男だと胸を打たれた。

戦後建設省から欧州に出張することになつた。きつと何かやるなと思つていたら、水源の調査とか

いう名目をつけて谷をきわめ山をさぐり、とうとう約束したガイドの到着を待ちきれずにマッターホルンの単独登山をやり遂げ、降りて来たやはり約束どうりの案内料をとられたというところなど、同君の面目躍如たるものがある。

数年まえ参議院の選挙が近づいたある日のことと思うが、久しぶりにやつて来て、どうも自分は役人のガラではないから、一つ政界に出て見ようと思うとのこと、私は今の日本内地の政界よりは国際機関の中にもとはいって外国で働いたほうが君に向くのではないかと私見をのべたのであつたが、間もなく先輩に相談して見たら、どうもパツとしないようだから止めたとのことであつた。その後間もなく病気で入院との報を聞いたのである。

長い闘病の末に君は逝つた。霞町の教会の祭壇に花をささげながら、マッターホルンを背景にペレを被つてほほえむ君の写真の前に立ち、まだ新しいスイス製のピッケルとザイルとをながめ入ると、君に顔をかしてまだまだ好きな山に登らして見たかつたとしみじみ思つたことである。

会務報告

十一月役員総会

二十一日(水)

場所 本会図書室
出席者 日高副会長、理事小原折井、辰沼、金坂、山崎、松丸村木、大塚、石坂、徳永、羽鳥

評議員神谷、岩永、成瀬、入沢藤木、監事石原、支部長木津、三井

議事及び報告

① 山案内書(日本交通公社発行)の件
来春四月頃発行の予定にて、企画。J・A・C監修を承認する。執筆は会員が担当して責任あるものとする。

② 第三次マナスル登山隊装備処理の件
文部省の補助金五百万円也は装備の購入費として受けているので、売却処分することは出来ない。一揃は本会に保存。各支部並に登山隊準備に援助して貰つた。大学山岳部などに貸与保管することに具体的処理を常務理事に一任する。

③ 日中体育総会と連絡の件
日中貿易促進議員連盟事務局干村信次氏(スケート連盟役員)が北京へ往訪の節に出た話に依り山岳に関しても、中共と情報交換をJ・A・Cとして正式に採上げることにする。

④ 上高地ダム建設の件
十一月十二日国立公園協会を中心に、反対促進運動を展開することに決定。J・A・Cから神谷、岩永両評議員出席した。

⑤ 九州支部設置の件
熊本支部並に福岡支部(仮称)設置の意旨が地元よりあり、これを促進するに決定する。

⑥ 第十二回団体準備の件
金坂理事より報告

静岡県当局においても「山岳」を実施する見とおしが大になつたので十一月三日、金坂理事が現地視察に出張した。(太田)

十二月役員総会

十七日(月)

場所 本会図書室
出席者 別宮会長、日高、松方副会長、辰沼、折井、石坂、羽鳥、成瀬、渡辺、沼井、村井、神谷評議員、石原監事、横名譽会員、高山信濃支部長
開会に先立ち中村清太郎氏の画を前会長横氏に贈呈、これに対し横氏より謝辞あり。

議事

上高地ダムについて
高山 実際にダムを作り、トンネルで持つて来た水が灌漑に役立つかどうか怪しい。平均温度がちがうし、雪解けか灌漑に役立つとは思われない。

横 それは水を小さく区切り日光であたためながらやるから大丈夫と思う。

松丸 十一月の役員総会の二日あつて関係反対団体が集まり反対氣勢同盟を作つた。山岳会としては絶対反対の立場を表明、あらゆる努力をする。発電計画が灌漑計画と直接むすびついており、それが誤解のもととなつてゐる。地元は灌漑計画を支持しているのだから、発電計画についてはそれほど気にしてない。水温に対しての反対は色々の方法があるので、それほど反対の根拠にはならないのではないかと思う。農業効果は思

つたほど大きくはないし、発電計画ときりはないにしても灌漑計画は出る。

高山 長野県では県会ですでに可決してゐる。

松方 かんどころをおさえ、それぞれ陳情したらどうか。

別宮 技術的なデータとなる資料をプリントしてほしい。こちら専門家をそろえて結論を出したい。

ヒマラヤ委員会議事録

卅一年十二月十七日

場所 本会図書室
出席者 松方、横、古市、別宮日高、成瀬、高山、小原、折井太田、辰沼、金坂、松丸、山崎石坂、羽鳥、神谷、沼井、渡辺村井、沼倉

松方 たゞいまよりヒマラヤ委員会を開催する。横さんより御報告願ひたい。

横 ヒマラヤ委員会の委員長は松方さんであるのに私の名で通知を出したことを、始めにお詫したい。

また報告が遅れ、年もせまつてからこゝで報告するに至つたことも申われないと思う。毎日新聞はじめて国民各位や国家よりの援助まで受けたようであるのでその方への報告に追われていたので遅くなつたものである。隊員が全員そろつて挨拶に廻つたのは、東京、大阪、小倉であるが、その後十一月一杯かゝつて、全国の主だった都市を残す所なく、報告の講演会を行つて来た。また隊員の個人的報告もそれぞれ行われている。その前に映画も完成され、毎日と本会との主催で試写をして歩いたが、こ

これは感謝の意味の報告会であつて、有料試写会には一度も出ていない。また毎日ではすべての行事に本会との共催の形をとつてくれているが、費用はすべて後援会の方で持つて呉れたものである。以上によつてマナスル登山については一応会としての報告がすんだ所である。そんなわけですべての段取りをつけるのに時間追われていた次第である。映画、報告書のローヤリティはすべて毎日に差上げることになつてゐる。しかし隊員個人の報告費出版については、面倒なことは少しもいわれていない。今後に残された問題は、第三次登山隊の正式報告書をまとめることで、原稿については早くから隊員に依頼してある。この報告書については、私案であるが、単に毎日に資料を提出する形ではなく、会としての意向も取入れ、隊員の意向も取入れ、隊員の意向を考慮して作りたいと考えてゐる。

これは年が明けてからの話になると思うが、常務理事にも集まつて頂いて一緒に考えて行きたい。第二次登山隊の報告が欠けているので、これも補うよう堀田君に頼んである。昨年の先遣隊に関しては書類がほとんど四散して困つていたので、第三次においては、金属の書類ケースに全部保管することにした。だから装備の注文の交渉から、値段についての細かいことまで分かるようになってゐるが、今の調子で片手間に整理を続けると一二年はかゝることであろう。この書類の保管については、登山隊として始めから計画して残

したものである。しかし始めから庶務にたずさわっていた松田君が南氷洋についてしまったので、その後を金坂君に引いて貰った。現在整理がついてないの、一般に公開する訳にはいかなないが、必要なのは私か金坂君に連絡してほしい。話は戻って毎日から少年向きの報告書執筆を依頼されているが、まだ仕事は進んでいない。加藤君も出版の計画があるが、隊員は誰でも出して差支えないことになっている。

なお報告書は後援会から沢山頂いて、各方面、海外へも広く贈つてある。ギャルツェンを呼ぶについては、カトマンズに戻ったとき、後援会から日本へつれて来たところからという話があったが、これは私の一存で取止めにしておいた。というのは、外貨に対する心配があつたからで、大蔵省からヒマラヤについてはこれきりにしてほしいと駄目おしをされていた次第だ。実際呼んだときは毎日の費用の下に、本会の名で呼んだものである。ギャルツェンが来たとき、シェルパのアシエンションのテンジンから、パッジを日本で作ってほしいと申入れがあった。これは後援会の費用で作って贈つたが、大小二百個である。これとは別に、マカール登山に参加したシェルパがフランス隊からパッジを貰い、それを誇りとしていたの、本隊もJAC略章を贈つた。ネパールでも山岳会ができ、いいものにしたと考えているようだが、仲々大変である。本会の定款を折井君の所で確認して貰つて送つてやりたいと思つてゐる。

海外からの祝電に対しては、成瀬、折井君からすべて礼状が出されてゐる。計画の当初から会とヒマラヤ登山後援会との連絡をやつて呉れた成瀬君に感謝の言葉を送りたい。外貨についても毎日のように外務省に通つて呉れたものである。

また募金の仕事については、毎日から古市さん、本会から早川種三さんが出てやつて頂いた。経理の報告は成瀬君からやつて頂くことにする。いままでの隊は赤字を残しているが、今回は予算を立て、厳格に守つて来たので、赤字はないから御心配なく。しかしこれは、シェルパやポーターの賃金を値切つて浮かしたようなものではなく、一二次の隊の経験から旅が上手になつたのだ。これは余談であるが、果物の缶詰にしてもミカンばかりで、白桃はほとんど顔を見せなかつたが、聞いて見ると、やはり値段の關係でこうなつたのだそうだ。文部省から五百万円頂いたとき、これは装備に使うということになつてゐた。年度末までに簡単にいゝから報告を出せということになつてゐる。役所からの援助は、使つた後は返すのが普通であるが、辰沼君を通じてお伺いをたてたら、返さないでいゝとのこと。今は隊員、シェルパ、ポーターに支給した以外の、公に使つたものが残つてゐる。後援会の品物ということになつてゐる。これは売るわけにはいかない。売つて文部省に返すわけにはいかなない。品物は松田、大塚君に整理して貰つた。これが会においてあると迷惑千万だ。また国分商店で

部屋を貸して呉れたが、登山が終つたら空けてほしいとのこと、そちらに預けるどころか、預けてあるものを引取らねばならない。装備の処分については、常務理事に考えて貰つてゐる。現在毎日に四組預けである。あちらこちらから借用の申込が多いので、会としては世話が焼けるので、事業部に提供し、展覧会への発送等世話焼いて頂いてゐる恰好になつてゐる。展覧会用の申込はいつまでも続いているので大変な仕事だ。

古市さんが沢沢敷三さんに会つたとき、装備を国立科学博物館においたらという話があった。また支部にあずけて保管して貰つたらという案、準備を手伝つて頂いた各大学山岳部にあずけて使わせるという案もある。これをヒマラヤ委員会でおきめ願いたい。装備としては露営用具、その属品、炊事用具、登攀用具、その他予備、ハンディトーカー、酸素シリンダー、発電機等がある。登山隊は本日の報告を終えることによつて解散したい。

成瀬 会計報告あり。今回の残金としては四百五十万円あるが、第一二次隊の赤字千九百九十九万円、その他の経費不足分約五百万円あり、これらの赤字は別途毎日の方で埋めてある。

古市 無線機の処理などについて松方 委員会は本日をもつて解散することにする。JAC内の委員会については別に考える。委員会として残つた仕事は、装備その他の財産と、にも常務理事会に引きつづ。

て会に一組を残し、科学博物館に一組おき、その他については別に考える。また日高氏より、ザイルを切断して使用不可能ならしめ、額のデコレーションにするとか記念品を作成したらどうかとの案あり。

一月理事会 二十二日(火)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、松方、日高副会長、理事折井、辰沼、太田石坂、小原、山崎、徳久、金坂村木、羽鳥、松丸、監事諸岡

議事

①九州支部の件 北部九州支部が福岡、佐賀、大分、長崎の各県を対象として創立され、二月はじめ発会式をあげることにした。本部を代表して松方副会長が出席の予定。(折井)

②ヒマラヤ委員会設置の件 将来のヒマラヤ登山隊の窓口として設けたい。窓口という意味はその計画を生かし指導するという立場をとりたい。そのため資料をあつめそれを生かして行きたいので指導と資料保管の二つのセクションを設け、出来ればこれまでのヒマラヤ登山隊の隊長などに指導してもらいたい。(辰沼)

さしあたり数名のメンバーを設けておき、ことのあつたとき必要に応じてやつたらよいのではないかと全部の陣立をして待つてゐることではないと思う。(松方)

報告

①マナスル登山隊朝日スポーツ賞 授賞および天皇より銀杯ご下賜の件、一月十六日朝日新聞からスポーツ賞をもらい、また旧ろう二十

六日隊員は天皇陛下から三つかさねの銀杯を下賜された。(小原)

②競技団体会長会議の件、一月十九日体協加盟の競技団体会長数名が集まりスポーツ仲興に関する意見書を政府に提出した。

③団体の件、静岡県山岳連盟山本氏より準備状況の説明あり、会としては実施要項を早急に作製し準備を強力におし進めたい。(金坂)

④避難対策について、いま調査、予防、当事者からの相談依頼をやつてゐるが会としては積極的に動けず現在予防を主としてゐる。(辰沼)

⑤月例会計報告 二十九年年度以降の会費未納者は七十名ほどあり、請求しても返事がもらえぬ場合除名するかも知れない。(太田)

図書基金寄附 (敬称略)

▽千二百円也 富田治三郎

▽千円也 池田 知幸

▽四百円也 久保 利夫

▽二百円也 荒川 寛義

▽同 石川 明

▽同 郷 諭

▽同 浜野 正男

マナスル登山隊寄附 (敬称略)

▽五百円也 本門 正美

▽五百円也 齊藤 清吉

昭和三十三年一月廿五日発行

東京都千代田区

神田駿河臺四ノ六

社団法人 日本山岳会

発行人 山崎 安治

編集者 山崎 安治

電話 神田(25)八九五二番

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂